

旭川 & モンゴル

旭川市だからこそ
できること

東京では連日35度近い真夏日が続いた8月末。空港から一步出ると、とても肌寒く感じる。それもそのはず、温度計を見ると20度だ。この日訪れたのは北海道旭川市。北海道のほぼ中央に位置する札幌に次ぐ第二の都市だ。市内を歩いていると、まず目に付くのが車道の広さ。そして、碁盤の目のように整然と区切られた街並みが続く。JR旭川駅の周辺では、鉄道の高架化や駅前広場の整備など、再開発事業が着々と進んでいる。

「冬はマイナス20度になるのも珍しくありません。道路一つとっても、低温の影響でひび割れて傷んだり、道路の下の水が凍って霜柱のように道路を押し上げる。凍上現象」が起きたりと、寒冷地ならではの問題がたくさんあります。市民が快適な生活を送れるよ

特集 市民参加 あなたの一步が世界を変える



ゲル地区には水道が整備されていないため、家から遠く離れた井戸に水をくみに行くのは子どもの仕事

うに、試行錯誤しながら建築や土木の技術を開発してきたのです。旭川市役所で都市計画を担当する藤原美彦さんはそう話す。その技術を生かし、旭川市は、官民一体で国際協力に取り組んでいる。その舞台は、同じく寒さが厳しいモンゴルの首都ウランバートルだ。ここ10年で人口が120万人にまで急増したが、50万人の人口を想定してつくられた都市のため、とても収まりきらない。地方からやって来た人々は「ゲル地区」と呼ばれる郊外に移動式の住居ゲルや小屋を建てて住むしかなかった。ウランバートル市役所は人口増加に対応できず、ゲル地区の上下水道やガス、道路なども整備できないまま。冬はマイナス40度まで気温が下がるため、石炭を燃や



ウランバートル郊外に広がるゲル地区。市の6割の人口はここに集中しているといわれる

て暖をとる。その煙で大気汚染が引き起こされているのだ。この現状を改善するため、JICAは都市開発の計画づくりを支援。都市再開発法や土地法、住宅法、建設法など、都市開発に必要な法律を整備するため、専門家として2010年に派遣されたのが旭川市の幹部職員だった。これをきっかけに、両市につながりが生まれた。「市役所の職員という実務者同士だからこそ、共

有できることがあるはず」。旭川市は大きな一步を踏み出す。JICA草の根技術協力事業を活用し、ウランバートルの都市づくりを支えることに決めたのだ。

地域が一丸となってつながる絆

まずは現状を把握しようと、2011年から4回、市の職員と地元建設会社で組織された一般社団法人旭川建設業協会など民間のメンバーがウランバ

ートルを視察。すると、市の中心部でさえ、道路は穴だらけだった。「アスファルトの質の悪さ、施工技術の低さ、維持管理の不徹底など、寒冷地技術を伝える以前の問題が山積みだったのです」。参加者の一人、旭川市都市計画課の伊藤和宏さんは振り返る。

そこでこれからの都市づくりの参考にしてみよう、ウランバートル市役所の職員延べ9人を旭川市に受け入れて研修を実施。アスファルト工場や浄水場、下水処理場などを視



ウランバートル市役所の建築士エンフトウジンさんから、市の模型を見ながら都市計画について説明を受ける伊藤さん(左端)

寒冷地技術で都市の未来を変える

マイナス41度。日本の最低気温の記録を持つ北海道旭川市。寒冷地という特性と向き合い培ってきた都市づくりの経験を、モンゴルの都市問題の改善に役立てようと奮闘中だ。



北海道の研修で寒地土木研究所を訪れたウランバートル市役所の職員たち。車の冬用タイヤチェーンでアスファルトがどうすり減るかを調べる装置に興味津々



ウランバートル市道路局で寒冷地の課題を共有する藤原さん(右から3人目)と落合さん(右から2人目)



旭川市内の道路工事現場では、電気を通して雪を溶かすロードヒーティングの仕組みを見学